

れ発表されました。

取りまとめの中で角田氏は「カラダに染みついてしまったものを変えなくてはいけない。まずは大人が、どうやって変えるかが最大の課題」と話されました。

※ESD (Education for Sustainable Development) とは、経済活動や開発を自然環境と調和させ、住みよい地球を次世代に残すための活動や教育を意味し気候変動やエネルギー、貧困など幅広い課題を含んでいます。

各地からのたより

伐採・造林一貫

作業システムの説明会

〔東信署〕十一月二十六日、東信森林管理署と長野県林業センターの共催で「伐採・造林一貫作業システム」の説明会を行いました。

林業の低コスト化に向け、東信地方では初めての取組として、高性能林業機械を使用して枝条を整理し、すぐにカラマツコンテナ苗を植栽する一貫作業システムを実施し、また、攻めの農林水産業の実現に向けた革新的技術緊急展開事業の「コンテナ苗を利用した低コスト再造林技術の実証研究」として、林業センターをはじめとする試験研究機関により、コスト分析等の調査を行いました。

説明会には、上小・佐久地方の林業事業体や林業関係者等約七十名が参加し、午前中は、浅間山国有林で作業システム



埼玉式ニホンジカ防護ネット設置の様子

の説明、コンテナ苗の植付道具や植栽方法の説明後、埼玉式と林業センター式のニホンジカ防護ネットの設置状況を視察しました。

午後は、会場を室内へ移動し、林野庁、森林総合研究所、林業センター、信州大学の担当者から全国の一貫システムの動向、実証研究の状況や今回の調査結果、当地域での留意点等について、またコンテナ苗生産者の立場として長野県山林種苗共同組合から育苗の現況が説明されました。

その後、中村森林整備部長の進行で討論が行われ、林業事業体から多くの質問・意見が出され、熱心に意見交換が行われました。

この新しいシステムに対する関心は高く、東信地方において「伐採・造林一貫作業システム」についての理解を深める説明会となりました。

「ご神木の里で木曾ヒノキの文化と歴史を語ろまいか」が開催されました。

〔東濃署〕十月十八日・十九日、中津川市付知・加子母地区において、木曾ヒノキ備林や地域の木造施設等の見学会「ご神木の里で木曾ヒノキの文化と歴史を語ろまいか」が開催され、地元岐阜県や愛知、三重、遠方は東京から応募した十一名の方が参加しました。木曾ヒノキをはじめ古くから森林や木材との関わりの中で育まれてきたこの地域の歴史や文化を多くの人たちに知ってもらおうと、地元関係者で組織された裏木曾古事の森育成協議会が主催し、今年で二回目となります(共催…東濃森林管理署)。

一日目は、東濃署での開会式のあと、木曾全山の総鎮守である護山神社で、宮司より御由緒を聞き、中津川市指定天然記念物の「井出之小路の木曾大ヒノキの標本」(初代大ヒノキ)を見学しました。樹齢九百五十年、直径二三八センチ、九五メートルという大きさに参加者の皆さんから感嘆の声が上がりました。次に、江戸時代に尾張藩から裏木曾三か村(加子母、付知、川上)の山守を任された内木家を訪問し、二十代目ご当主から当時の山守の仕事について話を伺いました。カヤの大木がそびえる表門をくぐり、江戸時代から続く母屋のいろりを囲んで会話が弾みました。その後、森林組合の木材

市場、古刹「宗敦寺」、その本堂の新築を請け負った宮大工工房、木曾ヒノキを用いた神棚の製造工場、御嶽参りの街道として賑わった王滝新道の起点「辻堂」を巡り、この地域の文化や匠の技をご紹介します。また、夕食後は、地元郷土史家ら三名が「裏木曾地域と御杣山の歴史」「三つ緒伐りの伝統を守る」「木曾ヒノキと歴史的建造物」について話題を提供し、アルコールも交えて夜遅くまで参加者と地元関係者の温かい交流が続きました。



いろりを囲んで裏木曾三か村の山守の話を聞く参加者の皆さん

二日目は、加子母裏木曾国有林内の木曾ヒノキ備林を東濃署職員がご案内し、平成十七年に行われた伊勢神宮の御用材(ご神木)伐採式跡地、珍しいヒノキとサワラの合体木、初代大ヒノキの後継木で裏木曾のシンボルである二代目大ヒノキなどを見学いただきました。

参加者の皆さんからは、「天気もよく

楽しいツアーで嬉しかった。また、スタッフさんのもてなしが良かった。」「めったに行けない場所を見に行けて凄く良かった。死ぬまでに一度大ヒノキが見たかったので大変嬉しかった。ここは観光資源が沢山ある場所なので羨ましいです。」「見学する場所での説明が丁寧でとても分かりやすく良かった。今後、こういう良いツアーを着地型観光に結び付けていけると良いですね。」などの感想が聞かれました。



二代目大ヒノキの前で記念写真

主催者の三浦八郎・協議会会長は、「この見学会は参加者の皆さんから好評をいただき、地元の価値を見直す機会にもなっており、これからも継続して、地域づくりにつなげたい。」と語っておられました。

東濃署としても、こうした地域の歴史や文化を伝える取組に積極的に参加していきたいと考えています。

岐阜労働局新任労働基準監督官 の実地訓練受け入れ

【岐阜署】岐阜労働局から新任の労働基準監督官の実地訓練として林業の現地を勉強させてほしいとの協力依頼があり、十一月二十日、七名の訓練生を受け入れました。

最初に森林技術・支援センターにおいて、三村森林技術普及専門官が、伐倒の方法・かかり木処理・集材機集材について模型を使った説明を行いました。訓練生からは、安全なかかり木処理や集材装置の動き等について活発な質問がありました。



森林技術・支援センターで説明を聞く訓練生

その後、場所を門坂国有林に移し、チェーンソーによる伐倒、ハーベスタによる伐倒・枝払い・造材の見学を通じ路網

による作業システム等について学んでいただきました。

説明の一部を、岐阜署の平成二十六年採用者が行うなど、当方の人材育成にもつながりました。帰りには、カモシカの見送りを受け、大変有意義な訓練であったとの感想もいただいています。



現地で説明を受ける様子

今後、労働基準監督官として全国で立派に活躍される一助になったのではないかと考えています。

付知中学校生徒林業体験

【東濃署】十月二十二日・二十四日、津川市加子母裏木曾国有林等において、付知中学校二年生二名を受け入れ職場体験を実施しました。

間伐現場での検知や測量、立木調査を

実施したり、土木業務で使用する測量器械の取扱いを学びました。国有林の中で行われている復旧治山の現場では、工事方法の説明を受けたほか安全帯をつけて斜面の吊下がりを経験しました。

生徒たちは、「工事現場では実際に実施している人と同じ姿勢に成って初めて気持ちが変わった。」「間伐は迫力があつてすごかった。」「何事にも真剣に取り組むことを学んだ。」と体験の感想を述べてくれました。東濃森林管理署としてもこのような機会を捉え、地域の取組に積極的に参加していきたいと考えています。



職員から署の業務について説明を受ける生徒

寄稿

かつて木曾ヒノキや天然広葉樹を運材し、地域住民に愛され続けてきた森林鉄



団子島13km地点 栃洞支線分岐

道に関する思い出や楽しい出来事などを、OBの皆様から、ご寄稿いただきました。国有林の歴史を示す貴重な財産としてここに掲載させていただきます。

森林鉄道の終わる頃

元高山営林署 古川 精次氏

新城営林署が管理する段戸国有林は、面積およそ六千^{ヘクタール}、スギ、ヒノキの人工林で一％程モミ、ツガの天然林を学術参考として残してありました。

入山は飯田線本長篠駅で、私鉄田口鉄道に乗換え鳳来寺、田峰駅などを経、終点田口駅を利用、田峰、田口駅からは林鉄の世話になり、先は徒歩でした。「山は歩いて観察せよ。」とよく云われました。

田峰から三都橋、団子島、鰻沢までの林鉄を管理している豊邦担当区団子島事業所に勤務したのは、昭和二十八年から三十一年の三年三ヶ月でした。事業所は、田峰から十三^{キロメートル}、栃洞支線の分岐点、北設楽郡段領村豊邦にあり、笠井

島、団子島、桑平の集落があつて林鉄は集落の中を通つておりました。集落には小中併設の学校があり、三十戸足らずの交通不便な山間です。人々は歩くことは気にせず当然なことで諦めていた様です。

林鉄は、人々の生活と深く係わりをもつ存在であつたと思います。

この地方では、伐倒・玉切・剥皮し任意の場所へ集積（りん積）までが柚の仕事で、木材の乾燥をまつて、木馬、木寄などの手法で林鉄まで出し、田峰土場へ運搬、極積し販売されており、鉄道の貨車で消費地へ運ばれていました。



伐採現場（りん積）

林鉄のトロは掘田式ブレーキで乗り下げ、三都橋から田峰工場まで機関車で牽引しておりました。満載の木材の上でブレーキのロープを捌きながら、レールの軋む音を残しカーブで見えなくなるトロの無事を願つたものです。

幌つきエンジン搭載の自動トロが配置され便利になったのもこの頃でした。事業所は、車輛運行の調整役を担つて

おり、調整頻度も多くなつてきました。無断でトロを乗り下げる不屈き者もあり、かなり緊張する毎日でした。夜中に火傷の人や病人、助産婦の迎えなど急を要する要請にも何度か応えてきました。地域との係わり、職務との兼ね合いに悩みましたが、十三^{キロメートル}歩いて逢いに來てくれた彼女の勇氣に感激、励まされました。

昭和三十一年春結婚荷物、秋の転勤引越等、林鉄の世話になりました。その林鉄も車道工事の土砂運搬を最後に役割を終えました。

古川営林署担当区主任に赴任し、最初の仕事は軌道敷下げでした。

引越十三回つきあつてくれた女房との第一歩が森林鉄道の終わる頃で、感無量です。



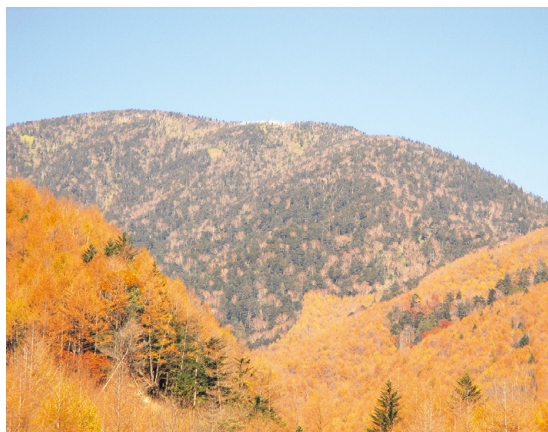
【木曽署 藪原森林事務所】

首席森林官 野尻 靖

藪原森林事務所は、長野県木曽郡木祖村に所在し、約七九〇^{ヘクタール}の国有林野を管理しています。

木祖村は、木曽川「源流の里」として、森林の機能を発揮し、多くの国民に親しまれています。

木曽川下流域の愛知県日進市やNPOには、下流の水は上流の森林の恩恵であるとの格別なご理解をいただき、毎年、



鉢盛山

分収造林（平成日進の森林）や村有林等において、関係者・一般市民等合同で森林整備をして、上流・下流の交流による絆を深めています。

「鉢盛山」（標高二、四四六^{メートル}）は、松本市、朝日村と境をなし、太平洋と日本海の分水嶺で、木祖村側は、木曽川の源頭部となつており、鉢盛山コマツガ等林木遺伝資源保存林に指定され、貴重な自然環境が保全されています。山頂の少し北の地点からは、穂高連峰、御嶽、乗鞍、浅間山、松本平などを眺望することができます。

木曽川源流部にあたる「水木沢天然林」は、木曽ヒノキ・サワラ・ネズコの中にブナが生育している貴重な森林で、郷土の森として、木祖村と協定を締結し、歩道が整備され、入林者を楽ませています。赤沢自然休養林とはひと味違う趣があるので、是非訪れてください。木材生産、森林整備は、人工林ヒノ

キ、カラマツが中心ですが、木祖村の人工林の約六割をカラマツが占め、なかなか間伐等森林整備が進まなかったところ、今年締結された「木曽谷流域森林整備推進協定」に基づき、藪原土場の一部を木曽官材市売共同組合に貸付し、民有林材も受入れ、流通することができるようになり、民国連携した木材利用及び森林整備の活性化に期待がかかっています（8月号P8参照）。

管内の森林をみると、ヘリ集材の活用にもみられるように、林道に近い好条件で搬出することができる林分が非常に少なくなってきたっており、今後の木材生産と森林整備をより計画的、低コストで効率化するため、いろいろなアイデアを出しながら総合的に実施していくことが要求されていると考えます。本数調整伐の対象



水木沢天然林源頭部（筆者は右から二人目）



藪原土場の様子



ヘリコプター集材の様子

林分にも良質なミズメやウグイスカンバなどの有用広葉樹も数多く生育しており、すべて植栽木を優先させるのではなく、常に需要や市況の情報を把握しながら、木材利用の活性化と健全な森林を造るため、将来的な視野で森林を育成させなければならぬと感じています。

森林レクリエーションについては、「やぶはら高原スキー場」の一部に国有林野が活用されており、北斜面の良質なパウダースノーと変化のあるゲレンデで

人気があります。皆様のご利用をお待ちしています。

木祖村は、とにかく行事・イベントが多いところで、人が温かく、活力みなぎるところです。情報交換や交流を通じて局管内にもよくみられる酒席森林官と化しています。なお、倫理規程に抵触する行為はしてないのでご安心を（笑）。

当森林事務所の職員は、森林官、係員（将来の長官）、森林技術員三名（現場の経緯・状況、村内の歴史等頼りになります）。計五名で、「どんなに多忙・困難な場面でも楽しくやろう」をモットーに健康と安全第一で明るく業務に取り組んでいます。これからも笑顔で楽しみながら国有林及び地域に貢献してまいりたいと考えています。



やぶはら高原スキー場

人のうごき

中部森林管理局人事

十一月三十日付

▽休職（木曽署森林技術員）

（平成二十七年一月四日まで更新）

安原 清文

▽休職（木曽署森林技術員）

（平成二十七年一月二十日まで更新）

牛丸 政治

▽休職（南木曽支署 森林技術員）

（平成二十七年二月十三日まで更新）

下林 浩二

行事・会議等の予定

◎森林管理局事業担当課長会議

1月22日～23日 林野庁

◎中部森林技術交流発表会

1月28日～29日 中部局

お悔やみ申し上げます

故 安原 清文氏

木曽署 藪原森林事務所 森林技術員

森林技術員 安原清文氏（五十八歳）は十二月六日に、ご逝去されました。安原氏は、王滝営林署、木曽森林管理署に勤務され、活躍されてきました。

謹んでご冥福をお祈りいたします。



黒曜の水(水場)

長和町は長野県の中東部、小県郡の南部に位置し、平成十七年十月に長門町と和田村が合併して誕生し、町名は両町村の頭文字より命名されました。

◆豊富な水の町

町内和田地区の旧中山道沿いには、湧き水を中心とした水呑場が、みどころとして各地に設置され、気軽に美味しい水を飲むことができ、水明の里といわれるほど四季を通じて豊かな水に恵まれています。なかでも中山道の難所であった和田峠周辺は、黒曜石の産地として全国的にも有名ですが、ここから湧出する水は



「黒曜の水」と名付けられています。

地元では、和田峠の黒曜の水は、超軟水で腐らない水として、昔から水道水源として利用されてきました。水場は新和田トンネル料金所近くに設けられていますが、遠方からも黒曜石により濾過された名水を求め多くの方が汲みに訪れています。

◆鷹山(たかやま) 遺跡群

大門川支流の鷹山川上流の盆地状の地形にいくつかの旧石器時代の遺跡が点在しており、これらを総称して鷹山遺跡群と呼んでいます。



グランシュたかやまスキー場から星糞峠を望む

この遺跡は、地元研究者であった児玉司農武氏(同町大門出身)により発見され、黒曜石原産地における旧石器時代の活動の痕跡が次第に知られることとなりました。

また、一九九〇年代になって、近くの星糞(ほしくそ)峠一帯で縄文時代の黒曜石の採掘跡が確認され、星糞峠黒曜石原産地遺跡(国史跡)として現在も研究が進められています。

黒曜石や遺跡に興味のある方、石器作りを体験したい方は鷹山地籍に黒曜石体験ミュージアムがありますので、一度訪れてみてはいかがでしょうか。

◆長久保宿と本陣(町指定文化財)

長久保宿は慶長七年の中山道制定に伴い真田氏の支配下により宿場が形成されました。寛永八年の大洪水により、宿場を現在の地へ移し、本陣・問屋を中心に東西方向に「縦(たて)町」が、宿が賑わうにつれて「横町」が形成され特異なL字型の町並みとなりました。

一時は四十軒前後の旅籠屋が軒を連ね、中山道信濃二十六宿の中では塩尻宿に次ぐ規模であったとされています。

この長久保宿にある本陣は真田幸村(二〇一六年大河ドラマ「真田丸」)の主



長久保宿本陣

人公)の娘が嫁いだとされる石合家が勤め、現存する遺構は御殿と表門があり、御殿は十七世紀後半の構築と推定され中山道中では、最古の本陣遺構といわれています。

◆公共建築物への地域材利用

町は積極的に長和町の自然の中で育った地域産の木材利用に取り組んでおり、本年十月に竣工した長和町の統合保育園(ながと保育園)は「自然の懷に抱かれ、太陽の恵み、風の流れ、木々のぬくもりを感じ」との設計コンセプトにより地元産カラマツをふんだんに使用して建設されました。

ながと保育園園舎と
絵本広場(左)

構造材の約七割は、町産材であり、高齢級の国有林材は要所に柱材として活用されました。

現在、町では役場庁舎の新築に着手しており、引き続き地域産の木材利用を進めるなど歴史に息づいたふるさと創りに取り組んでいます。